

咲く勇氣

小学校6年生の秋。運動会の団長を決める時間。学級のだれも手をあげなかった。もちろん、私も。その時の教室には、面倒だ、だれかがやればいいのに、自分が目立つのは嫌だ、という空気が漂っていた。担任の先生は、こう言って私たちを説諭した。

「みんな、『咲く勇氣』という言葉を知ってる？みんなの中には、やってみようか迷っている人がいるでしょう。勇氣を出して手をあげてみなさい。いつもの自分を変えるいい機会だよ。」

それでも私たちはだれも手をあげなかった。

「しょうがないわね。一晩考えてきなさい。明日また話し合いましょう。」

先生はそう言い、その時間は終わった。

家に帰って、両親にその話をすると、中学校の教員をしている母は、自分の経験に照らし合わせ、私に話をした。

「担任をされていていちばん嫌なことは、学級の生徒にやる気がないことよ。明日『僕がやります』って手をあげなさい。先生にお世話になっている恩をここで返しなさい。」と。

『咲く勇氣』。この言葉が、その後から現在のいろいろな場面で、私の背中を押してくれた。団長は結局、私より先に立候補した友達がすることになり、私の『咲く』場はなかったが、その後、中学校に進学しても、係活動や部活動、先生や友達と接するとき、自分で勉強するときにも、つい「だれかがやってくれるだろう。」とか「仕事が増えて面倒だ。」などと後ずさりする気持ちを、後ろでがっちり受け止めてくれる思いがする。

面倒と思っても、引き受けてやってみると、案外簡単にできたり、周りの友達が手伝ってくれたりするものだ。友達の意外な一面を発見したり、そのおかげで自分も成長したり、いいことが多かった。ほんの少しの『勇氣』をもつことで、自分を表現できる。この世の中を生きぬいていける。そんな言葉を教えて下さった先生に、私は小6で出会った。

川井田 翔

(一般)